

# 「東亜同文書院」「愛知大学」 創成の軌跡

1901~



東亜同文書院 徐家匯 虹橋路校舎

愛知大学 豊橋校舎（正門・本館）



1946~



# 「東亜同文書院」「愛知大学」創成の軌跡

## ～19世紀以降、将来を見据え始動した日本のグローバル教育の変遷～

### 5 近衛篤磨と「南京同文書院」、「東京同文書院」



近衛篤磨

東京同文書院

その一方、貴族であった開明的で行動的な近衛篤磨の登場がありました。近衛は明治維新で小生時代に京都から東京へ移りますが、ほとんど独学で英語を家庭教師のもとで修得し、イギリスからアメリカへの留学を計画します。しかし折からの自由民権運動に加担するのを恐れ、日本政府の三条美実らに反対され、結局、ロシア(現ドイツ)、オーストリアへの留学に変更します。留学中、近衛は現地ドイツ語をマスターし、6年間でドイツ語の論文で学位をとり、すぐれたリターゲーターとしての地位を重ねます。近衛は藩閥政治や軍人嫌いに、貴族こそがリターゲーターとして活躍すべきだと学習院長として、その改革をすすめます。

そして2度目の外遊でアメリカ、ロシア、バルカン、プロシヤなどを回り、西欧列強の東アジア戦略を知ります。そこでその帰路、清国へ立ち寄り劉坤一、張之洞ら指導者に会い、清国の教育レベルを上げることも西欧列強に對する抵抗力になると主張し、南京に日清学生が共学する「南京同文書院」開設への認可、協力を得ます。清国側からは即座に留學生の送付の計画も出され、近衛は帰国後の1899年に、清国留學生の受入学校として東京目白の自宅敷地に「東京同文書院」を開設します。

### 6 「東亜同文書院」の誕生と根津一

1900年、近衛は南京に日本人と清国人共学の「南京同文書院」を開学しました。その半年後、折からの義和團の乱が拡大し南京を攻める恐れが強くなったため、「租界」のある上海へ移転します。そして、そこで前述した荒尾精が構想していた新たなビジネス学校と合体し、1901年上海南郊の高昌廟に「東亜同文書院」を誕生させたのです。

なお、前述のような動きの背後で、日清戦争後、従来の欧米指向でなく、アジアへ目を向けるいくつかの組織が生まれます。そのうちの2大組織で、犬養毅らの「東亜会」と近衛が代表する「同文会」が合体し、「東亜同文会」が誕生します。そして同文会会長であった近衛篤磨が新組織の会長になります。その主旨は東亜会がもっていた政治的匂いを弱め、日清間の教育文化事業に重点を置き、「東亜同文書院」の学校経営や大陸での事業を行うなど東アジアの共存を目指す強力な組織となります。



東亜同文書院

### 7 東亜同文書院から「愛知大学」誕生へ



根津一

新生「東亜同文書院」は院長に根津一が就任し、根津は60歳過ぎまで書院の顔として教育に力を注ぎました。「倫理」の授業を持ち、書院生に倫理感を与える実業家になるよう指導をしましたが、それは折しもヨーロッパでマックス・ウェーバーが論じた資本主義を包んだプロテスタントエティモスの東洋版に匹敵するものでした。中国大陸や東南アジアなどで経営者や、実業家になった書院卒業生は、現地の人々に慕われ、太平洋戦争直後、引揚げの時に、彼らは大陸の従業員たちから惜しまれ、送別会を催されたそうです。その背景には、書院生が在学中「大調査旅行」として徒歩中心で3、6カ月間貿易品調査、地域調査を行い、現地の人々とも親しく交流していたことがありました。「東亜同文書院」は1939年旧制大学へ昇格しますが、戦時色が深まる中、倫理感を持つよう指導される伝統は継続されませんでした。帰国後、その倫理感が日本の高度経済成長において大いに発揮されたという事実は、もっと知られるべきでしょう。

こうして荒尾精、近衛篤磨、根津一の3人の書院の「三先覚」(三聖人)は相互につながり、「日清貿易研究會」から「東亜同文書院」そして「東亜同文書院大学」へと発展させてきたのです。しかし、荒尾精、近衛篤磨がそれぞれ役割を果たす途上で早逝したことが、その後、日本が東アジア戦略の乱れを抑えられず悲劇をもたらした、ともいえるでしょう。

### 8 東亜同文書院から「愛知大学」誕生へ

本間喜一 荒尾精、近衛篤磨、根津一の「三先覚」、「三聖人」の思いを最終的に受け取ったのが、「東亜同文書院」最後の学長であった本間喜一でした。

本間は戦時下の最も厳しい時に学長に就任しました。1943年にはそれまで戦争に距離を置いてきた書院も、学徒出陣には対応せざるをえず、そんな中、出陣(通訳)が多かったりする学生達に「生きて帰ってこい」と内地の大学ではありえない言葉をかけて送り出しています。国際都市上海ゆえに日本の分校を予備した本間は富山県奥羽くればに分校を設け、1945年の入学生をそこで受け入れていきます。そして終戦直後、佐伯羽羽分長は書院のこれまでの日中関係に果たした役割をまとめ、戦後もその存続を活動者へ願いつけています。そして書院の教育活動を評価した外務大臣吉田茂がその願いを出を承認し、1945年10月に書院は復興に集まりました。0名以上の書院生が奥羽校舎に集まりました。しかし、経営母体の東亜同文会会長近衛文麿は、東京裁判出頭の前夜自殺し、東亜同文会は閉鎖されたため、復活した「東亜同文書院大学」も閉校せざるをえなくなりました。羽校舎のスタッフにより豊橋市街地南郊の旧陸軍第15師団(のち教導学校)陸軍予備士官学校跡を素早く手に入れた。GHQの厳しい監視の下、「愛知大学」を誕生させたのです。以外では初の旧制大学であり、終戦翌1946年11月15日に設立認可を受けました。これも東亜同文書院の太い流れのうえに、本間学長への信頼度による幅広い人脈が最高に発揮された賜でしょう。

こうして誕生した「愛知大学」へは、東亜同文書院からの編入生が最多でしたが、海外に存在した各種の学生たちが、総合引揚大学としての存在となり、また国内の各大学や高専などの学生も入学し、国内では他に例をみない異色の学校としてスタートしました。設立趣意書に「国際的教養と視野をもった人材の養成」「地域社会文化への貢献」を掲げた。書院以来の伝統が継承されたものといえます。



本間喜一

### 1 東アジアへの窓口になった上海

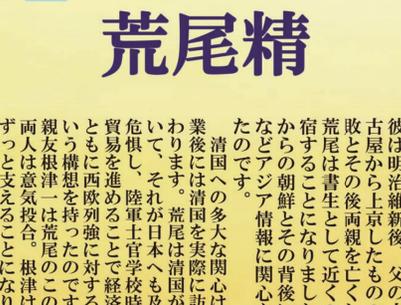


上海外灘(バンド)

19世紀に入ると世界の海を征し、東インド会社を核として東アジアへ進出したイギリスは、清国からの茶の輸入を増大させ、その輸入超過の見返りにアヘンを清国に浸透させるようになり過ぎた。それを警戒した清国は林則徐を対抗させ、イギリスとアヘン戦争(1840～42)になり、イギリスは武力に長じていたイギリスのこのアヘン戦争に勝利すると、清国との間に南京条約を結び、5つの港を国外へ開放することに。上海はその開港の一つとなり、すぐにイギリスは上海の北側にイギリス専管の「租界」を設けました。これが上海の国際化への幕開けとなります。すると、それを見たフランスも清国と交渉し、フランス「租界」を認めさせ、アメリカも追随しました。イギリス「租界」とアメリカ「租界」は1863年に「共同租界」となり、さらに1899年には日清戦争に勝利した日本もこの「共同租界」へ進出しました。

こうしてイギリスとフランス、さらにアメリカの「租界」が設けられた上海は、欧米の清国に対する貿易拠点となり、そして鎖国中の日本の近海へも開放するようになり、幕府は警戒し、幕府の是非で国内が割れることになり、幕府は警戒し、幕府は土を築き、オランダ、イギリスを介して上海への貿易と外交勢力の調査をします。幕末に長州藩や薩摩藩はイギリスと戦い、敗北を経験したことで、近代化された武器の威力を知り得た。そこで、上海を舞台にイギリスやフランスと幕府の密貿易を行い、藩の強化を図り、それが倒幕の明治維新につながりました。

### 2 上海での国際商人・岸田吟香と荒尾精



岸田吟香

日本にとって上海は、上段1の経過から、鎖国時代の長崎と同じように新生日本の外国への窓口になりました。そんな中、幕末にヘボンにつれられ和英辞書「和英語林集成」の印刷のために上海を訪れた岸田吟香は、短期間ながら持前の竹画を通じて上海の文化人や商人達との交流を行い、文字通り民間外交のパイオニアになりました。岸田吟香は、その目録を「東洋」を開設し、目録を販売して大きな成功を収め、日本人として初の国際商人といえるほどの存在になりました。さらに日本では初の新報社立ち上げや記者、船会社、印刷出版、石油採掘、社会事業と多岐な事業家にもなり、息子の岸田劉生は「麗子、これいっしょに生きて」の作者です。

なお、この岸田劉生の子である愛知豊橋市・豊川堂書店の高須光治は戦後「愛知大学」のロゴを創案し、愛知大学の校章や校章に使われています。この岸田吟香を上海滞在中に訪ね、日清提携への活動について教えを請うたのが荒尾精でした。

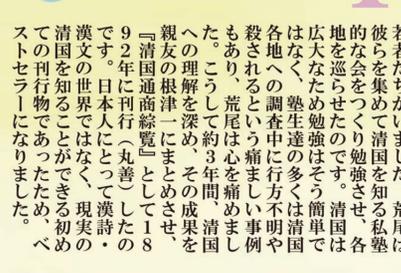


愛知大学校章

彼らは明治維新後、父の士族失業により名古屋から上京したものの、父親の商売失敗とその後親を近くした父の警察署長宅に寄宿することになりました。そこで彼は折々の朝鮮とその背後にいた清国の存在などアジア情報に関心を抱くことになったのです。

清国への多大な関心は、陸軍士官学校卒業後には清国を實際に訪れたいとの夢に変わります。荒尾は清国が西側に侵食されて危惧し、それが日本へ及ぶのではないかと貿易を進めることで経済力をつけ、清国とともに西歐列強に對する抵抗力を持つという構想を持ったのです。抗官学校時代の親友根津一は荒尾のこの構想に強く惹かれ、両人は意気投合、根津はそのあと荒尾をずっと支えることになりました。

### 3 荒尾精が開いた私塾



荒尾精

岸田吟香は荒尾精のこの日清提携構想(上段2記載)と清国の実情を知りたいという強い熱意を受け、清国中央という漢口(現在の武漢)に楽善堂の支店を設け、本屋に支店長を任じ目録と本屋を開きながら、中国の実態に触れられるように援助したので。そんな時期、日本の東北地方で戊辰戦争や九州での西南戦争で官軍に敗れ、政府から見放されたと感じ、清国へ渡った若者たちがいました。荒尾は彼らを集めて清国を知る私塾的な会をつくり勉強させ、各地を巡らせたのです。清国は広大なため勉強はそう簡単ではなく、塾生達の多くは清国各地への調査中に行方不明や殺されるという痛ましい事例もあり、荒尾は心を痛めました。こうして約3年間、清国への理解を深め、その成果を『清国通商概観』として1892年に刊行(丸善)として1892年、日本人にとって漢語の漢文の世界ではなく、現実の清国を知る物ができるため、ベストセラーになりました。

### 4 荒尾精の「日清貿易研究所」

荒尾精は、清国での活動から本格的な貿易実務者養成するビジネス学校が必要だと痛感し(上記3記載)、帰国後はその学校設立に奔走しました。場所は上海で、その際、資金確保が特に重要で、それについては日本政府が保証してくれたため学校名「日清貿易研究所」とし、日本全国で貿易実務者養成、150人が集まりました。こうして軌道に乗ったかにみえた新たなビジネス学校でしたが、支持が弱くなったため、政府の内閣が変更したことにより、政府の保証を失いました。荒尾は窮地に陥り、1890年開校にこぎつきました。清語学(中国語)、英語学、商業地理、支那商業史、経済学等の実業科目を揃えました。しかし資金不足もあり、学生の半数近くが退学し、卒業者は89名で、清語学が退学した卒業生は、日清戦争が起り、清国語のできる卒業生の半分は通訳に従軍させられ、多くが戦死しました。荒尾のショックは大きく、彼らの死を甲うため、京都の東山に隠棲してしまふほどでした。しかし、研究所に学んだ白岩重平は汽船会社を立ち上げた。日清戦争をきっかけに、清国に人財と清語学を求め、荒尾は戦後、あらためて本格的なビジネススクールとなるべく、「東亜同文書院」構想を描くのです。

1859(安政6)	荒尾精	現在の愛知県名古屋に生まれる
1860(万延1)	根津一	現在の山梨県山梨市に生まれる 幼名伝次郎
1871(明治4)	根津一	改名
1872(明治5)	根津一	横浜のヘボン博士の学校に入学するも病気のため帰郷
1877(明治10)	根津一	陸軍教導団へ入団し、1878年卒業
1879(明治12)	荒尾精	陸軍教導団卒業、大阪鎮台へ
根津一	陸軍士官学校入学	
1880(明治13)	荒尾精	陸軍士官学校卒業
1882(明治15)	荒尾精	陸軍士官学校卒業 熊本鎮台へ
1883(明治16)	根津一	陸軍士官学校卒業 広島鎮台へ
1885(明治18)	根津一	陸軍士官学校卒業
1886(明治19)	根津一	陸軍士官学校退学
荒尾精	陸軍を退役し、清国へ 漢口に英善堂設立	
1889(明治22)	荒尾精と根津一	日清貿易研究所設立を協議
荒尾精	大陸の事情を講演し、全国で学生募集	
1890(明治23)	日清貿易研究所を上海に開校(荒尾精所長、根津一同代理)	
1892(明治25)	根津一	所長代理「清国通商概観」を編集し、刊行
1893(明治26)	日清貿易研究所	89名の卒業生を出し、閉鎖
根津一	所長代理 帰国、京都林泉寺瀧水権師のもとで参禅	
1894(明治27)	根津一	日清戦争時に広島大本営御前会議で天皇に奏上 日清戦争開戦 根津一(の教え子)を失う
荒尾精	支那中会を組織	
1895(明治28)	根津一	参謀本部を辞し、京都で瀧水権師のもとで参禅
1896(明治29)	荒尾精	東方通商協会設立を目指す、台湾で客死
1898(明治31)	東亜会(大業代表)と同文会(近衛篤磨代表)が合併し、東亜同文会が成立、会長は近衛篤磨	
1899(明治32)	近衛篤磨	ヨーロッパからの帰途、南京に劉坤一、張之洞の両総督を訪ね、南京同文書院設立協力を要請
1900(明治33)	根津一	劉坤一、張之洞に会い同文書院設立趣旨の同意を得る 南京同文書院開校、根津一が初代院長となる。上海競馬場付近へ移転 義和團の乱が収まる
1901(明治34)	近衛篤磨	国民同盟会を結成
南京同文書院	を吸収して、上海南郊の高昌廟に東亜同文書院開設	
第一期生	69名入学	
1902(明治35)	根津一	院長 同文会幹事長になり、杉浦重剛が第二代理院長に
東京同文書院	閉校 日英同盟条約締結	
1903(明治36)	根津一	院長 第三代理院長に就任
1904(明治37)	近衛篤磨	逝去 東亜同文会会長は青木周蔵が就任
日露戦争開戦	東亜同文書院第一期生卒業60名	
1905(明治38)	第二期卒業生の5人	西域調査へ出発(3年間)
1906(明治39)	南満州鉄道設立	
1907(明治40)	鍋島直大侯爵	東亜同文会会長に就任
1910(明治43)	日韓併合	
1911(明治44)	辛亥革命	
1912(大正元)	中華民国設立、孫文が臨時大總統に就任	
1913(大正2)	民国第二革命軍の兵火で同文書院校舎焼失、そのため一時長崎県大村へその後ハスケル路校舎へ移転	
1914(大正3)	「農工科」設置 根津一は院長専任となる	
第一次世界大戦始まる		
1915(大正4)	日本が対華二十一条要求 袁世凱の帝制に反対運動	
1917(大正6)	上海西郊の陸軍軍械庫に新校舎竣工 孫文の広東軍政府成立 ロシア革命	
『支那省別全誌』全18巻刊行開始		
1918(大正7)	「中華学生部」新設決定「支那研究部」の設置 牧野伸顯子爵が東亜同文会会長に就任	
「政治科」廃止(第一九期生以降)		
1919(大正8)	「中華学生部」校舎完成	
1920(大正9)	「農工科」廃止に学生生も	
1921(大正10)	修業年限が4年に延長 中華学生部学生入学 中国共産党創立大会	
1922(大正11)	東亜同文会が財団法人に改組 会長牧野伸顯、副会長近衛文麿、理事長白岩龍平	
1923(大正12)	根津一 院長を辞し、京都伏見桃山へ隠棲、第四代理院長は天津麟平 関東大震災	
1924(大正13)	国民党第一回全国大会 国共第一次合作	
1925(大正14)	孫文 逝去	
1926(大正15)	近衛文麿 第五代理院長(兼東亜同文会副会長)	
1927(昭和2)	根津一 逝去	
1928(昭和3)	金融恐慌 濟南事件、張作霖暗殺、北京は北平と改称 国民政府成立し、南京を首都	
1929(昭和4)	世界恐慌	
1930(昭和5)	「支那」の呼称を「中華民国」へ	
1931(昭和6)	「中華学生部」募集停止 近衛文麿 院長を辞任 第六代理院長は大内暢三 満洲事変 魯迅死後(講演)	
1932(昭和7)	上海事変、学生は一時長崎へ引揚げ、上海へ復帰	
「満洲国」建国 五・一五事件		
1935(昭和10)	増進会完成、増進神社鎮座祭	
1936(昭和11)	近衛文麿 東亜同文会会長に就任、理事長に岡部長景子爵 二二六事件	
1937(昭和12)	第二次上海事変 書院生は長崎の旧女子師範の仮校舎へ避難	
第三四期生	通訳従軍 書院校舎、図書館、10万点商品見本戦火で焼失	
1938(昭和13)	東亜同文書院は隣接する上海交通大学の校舎を借用し臨時校舎とする	
近衛内閣「蘇政権を相手にせず」の声明 国家総動員法		
1939(昭和14)	東亜同文書院は大学に昇格 書院四〇期生(大学予科160名)入学 大学昇格の勅令公布	
1940(昭和15)	大内暢三院長 初代学長となるが、のち病気で辞任 矢田七太郎元公使 第三代理学長に就任 本間喜一 教授就任(書院教頭兼大学予科長)	
1941(昭和16)	東亜同文書院大学の本科学部開設	
大平洋戦争が始まる		
1942(昭和17)	第三八期生 繰り上げ卒業	
大平洋戦争がアジアへ拡大		
第三九期生 繰り上げ卒業		
東亜同文会会長に近衛文麿会長再任		
1943(昭和18)	東亜同文書院付属専門部を設置	
北京に華北高等工業学校、上海に東亜工業学校開設		
付属専門部が揚子江の瀋江大学跡から本院へ合流		
大學生の徴兵猶予の特典停止		
東亜同文書院大學生の学徒出陣		
1944(昭和19)	本間喜一 学長に就任	
中国人学生入学復活 北京専科開校		
付属専門部長も本間学長兼任		
1945(昭和20)	江南造船所へ出動中の東亜同文書院学生の勤務隊6人が米軍機の上で殉職	
第四六期生の多は富山県奥羽校舎の仮校舎で授業		
大平洋戦争終戦		
閉学、しかし書院継続を模索		
一旦は兵隊で書院復活するも経営母体東亜同文会解散(旧)新大学設立を模索		
上海の日本人は虹口地区に集結し、書院教職員は北四川路に集結		
書院校舎は中国軍に接収され閉学		
書院の閉学を受け、本間喜一が中心になり、愛知大学を開学		
多くの書院生と同教員、ほかに海外引揚学生たちも入学		
1946(昭和21)		